

第33回中世哲学会大会シンポジウム報告

論題：普遍について

司会 名古屋大学 大鹿一正

提題：普遍について——トマスの場合

聖心女子大学 宮内久光

提題：唯名論の系譜 アベラールとオッカム

北海道大学 清水哲郎

(於 上智大学 1984. 11. 18)

司会

大 鹿 一 正

本年度、第33回中世哲学会大会のシンポジウムは、「普遍について」という論題を掲げ、提題者に宮内久光、清水哲郎の両氏を得て行われた。両氏の提題の要旨は後に付されたごとくであるが、初めに宮内氏から、トマス・アクィナスにおいて、普遍の理論が認識論・存在論の場において如何なる形をとるかについて「可知的形象」の概念を中心にして解明せられた。次いで、清水氏によって、ことばとしての普遍の立場がアベラールとオッカムの場合について紹介せられ、ことばとしての普遍が、単に「ことばとものを等分に見る立場」ではなく、「ことばを携えてものに向かう現場の人間の立場」から成立するものなることが分析せられ、両者における「唯名論の系譜」の一貫性が説明された。両氏とも明晰な発表に加えて、予め『大会案内』の中に入念な『提題要旨』が提示されており、更に、清水氏は大会場において詳細な『提題資料』を配布されたこともあって、提題趣旨の理解と問題点の把握において提題者と会場の会員諸氏との間によく噛み合った議論が展開された。トマスにおいては、些か特殊と云ってよい普遍の理論と、所謂トマスの神学哲学思想体系なるも

のとの関係について疑念があり、アベラール、オッカムについては、普遍概念のものとの側における客観的妥当性の根拠に質疑が集ったように見受けられた。多数の発言を代表して、岩田靖夫、クラウス・リーゼンフーバー両氏に『意見』を添えていただいた。

普遍の問題は、夙に、中世哲学史における最も代表的な問題の一として喧伝されてきたところであり、会員諸氏の関心度も高いなか、アベラール、トマス、オッカム、とスコラの三つの時期を代表する普遍の理論家が取上げられ、それぞれについて現在世界の最先端を形成する研究成果が報告せられ、終始熱心な討議が続き活気のあるシンポジウムの展開を見ることができた。

提題 普遍について——トマスの場合

宮内久光

普遍の問題のみならず、知性的認識の成立そのものが可知的形象 (species intelligibilis) をめぐって集約的に論じられていると考えられる。

トマスは全著作を通じて、認識を存在論的に性格づけている。或るものが知られるのは、知られるものが或る仕方では知ることの中にある限りにおいてであり、その意味で「魂は或る仕方ですべてのものである」と言われ、「宇宙全体の完全性が或る一つのものの中に存在することが可能である⁽¹⁾」と言われる。それはまた知ることと知られるものとの同一性によっても表現される。intellectus in actu は intellectum in actu であり、sensus in actu は sensibile in actu である⁽²⁾。換言すれば、同一の本性が二つの異なった仕方では存在しうるのであって、自然においては esse naturale において、知性においては esse intentionale において存在する。可知的形象は知ることと知られるもの、および自然的存在と志向的存在を結ぶものである。

可知的形象は以下の三つの面から考察される。

(1) まず可知的形象は認識作用の原理である形相として提示される。認識の起源が感覚的経験に求められる限り、人間の知性全体は可能的知性であって、自己に固有な作用の原理としての形相をもたない。したがって知性はすべての形相に対して